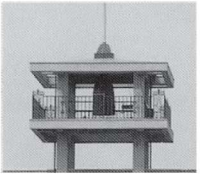
葛野の鐘

図書館報　—第 15 号—



京都光華女子大学図書館
2008.4発行
（http://www.koka.ac.jp/toshokan/）

（題字は元暦校本萬葉集より集字）

図書館入退館システムが新しくなりました

学生証の IC カード化に伴いタッチするだけで入館できるようになりました。

在学生の皆さんは順次 IC カードに変更していきますので、それまでは今まで通り学生証を通して入館してください。

全身で味わう大学図書館

図書館長　谷口敏夫

近頃、私はますます紙の図書や、「館」としての図書館を大切に味わいだしました。もちろん他方では朝から晩まで、インターネットやコンピュータにかじり付いて調べ物や書き物をしている、ディジタル情報世界に埋没しているような生活です。だからこそ、手や足や五官をともなった身体全体への思いが深まったのだと考えています。科学の話では、人間の脳が理屈や喜怒哀楽、痛み、希望、そういった心を造り出しているようです。それらはすべて脳内処理の反映であり、仮想といえば仮想、ディジタル情報世界にそっくりです。

しかし人間が外部の情報を取り入れて、その人の血肉にしていく過程には必ず身体性をともなう必要があると考えます。特に大学図書館のように若い学生達が自分の青春を過ごす場では、全身で味わうこと、手触りや匂いや感触込みで世界や本を味わうこと、この身体全体で世の中を受容することがとても大切です。形ある図書館空間の中で知の集積がもたらす圧倒的な力、図書の匂い、手触りを認知しながら一冊ずつページを繰って、「ここまで読めた」「ここまでの要旨をまとめた、分かった」と、目で見て指で触り身体で知ることが、人間にとってどれほど大切なことでしょう。

人間は脳だけで生きているわけではないのです。たとえ理屈や喜怒哀楽、痛みが脳の中の信号であったとしても、なお、そこに身体があってこその「人間」の営為なのだと考えます。仮想的な知的情報処理を否定するのではありません。ただ、図書という「物」が持つ圧力や、写本や初版本から得られる手触りや匂い、その奥深い書庫の背後に潜んだ膨大な情報への怖れや好奇心、それこそが若い学生たちの新たな夢想を生み出す契機となることも忘れてはならないと考えます。図書館とは、紙とディジタル情報とが形影あいともなった大きな「館」空間に、生身の人々が知的感性的世界を構築する場だと思うのです。

（文学部・全学共通教育センター　情報図書館学）

私と図書館

私と図書館

文学部　日本語日本文学科　糸井通浩（いとい みちひろ）

第二次世界大戦に敗戦した年、今いう小学校一年生であった。戦後の物資のない時期に、しかも田舎で学童期を過ごした私は、本に餓えながら育った。本を買って手にすることができると、それは宝物を手にしたのに似ていた。やがて読みたい本、必要な本は、買って我がものにすることが身に付いてしまい、図書館を利用することの下手な人間になってしまった。

多少とも好きなだけ本が買えるようになって来ると、とてもすべてを買って我がものにしておくわけに行かないこと（経済的理由と置き場所の問題から）を思い知らされるようになった。そこで、我が書斎（？）の延長上に図書館を位置づけて、私が利用する本・私の本の世界が、身の回りに置かれているものと特別室（図書館）に置かれているものとからなる、それが私の所有する本の全体と考えるに至った。肝心なことは、特別室（図書館）にどんな本を保管しているかをよく知っていることだ。

書店に行く目的には二つある。一つは買いたい本を買いに行く、一つはぶらっと何かおもしろい本ないかとあさりに行くことである。意外に後者は大切なことで、暇つぶしでなく、ぶらっと見に行くこと自体を目的にする。意外な、新刊本の存在を知って驚くことしばしば。図書館についても同じことである。開架式を中心にぶらっと並んでいる本をながめに行く。そんな図書館であり、そんな自分の図書館にしたいものである。

（日本語学）

京都府立総合資料館

人間科学部　社会福祉学科　柴田周二（しばた しゅうじ）

京都の北山通の植物園の近くに、国宝の「東寺百合文書」などを所蔵することで知られる、京都府立総合資料館がある。今では、京都に関する専門資料館になっているが、それまでは、ここは京都が全国に誇る優れた総合図書館であった。

私の30代から40代の夏休みや春休みの日課は、資料館が開館する9時前に自転車で家を出て、4時半の閉館まで、ここで過ごすことであった。ここには、古い雑誌や書物が意外なほど揃っていて、その複写を簡便にすることができた。資料館にないものは、東京の国会図書館へ行って探したりした。しかし、国会図書館というのは、あまりにも広くて、閲覧までの時間もずいぶんかかり、複写も長い待ち時間が必要であった。それに比べて、資料館は、建物の大きさが適度で、開架も多く、司書も優秀で、時には相談しながら、依頼すればすぐに資料が出てきて、複写も円滑であった。閲覧する机は大きくゆったりしており、東側の大きな窓からは、比叡山の雄姿が眺められた。仕事に疲れたときは、自分の専門外の書籍が並ぶ書架を回り、建築、美術、音楽、歴史、文学、哲学などの書物を手にし、思いがけない知識を得て、自分を見つめなおすことが度々であった。

それが、足が遠のくようになったのは、インターネットの発達にもよるが、2001年に、岡崎の京都府立図書館が建て替えられたときに、資料館に所蔵されていた書籍の約半分が移管されてからである。これについては、当時反対運動があり、私も、京都新聞に投稿したりした。図書館というのは、やはり総合的なものでなければならないと思う。別々に分割されるのは不便である。知識も人間も断片的になってしまう。研究生活の大事な時期をこの資料館に育ててもらった。

（社会経済学）

‡ *Topics 1* ‡

◆貴重書書庫を整備しました。

田嶋記念大学図書館振興財団の助成金により貴重書の保管用キャビネット等を購入し、地下1階貴重書書庫の整備をしました。

貴重書書庫の資料を利用するには所定の資料閲覧許可願が必要です。

◆新しく電子ジャーナル WILEY InterScience（ワイリー インターサイエンス）が加わりました。

医学、科学技術の専門分野を代表する600タイトルを超えるジャーナルの抄録が利用できます。コンソーシアムPULCの購読契約による資料は全文を見ることができます。

私の薦めるこの一冊

『崩食と放食（生活人新書 205）』（NHK 出版　2006 年）

NHK 放送文化研究所世論調査部編

人間科学部　健康栄養学科　北川郁美（きたがわいくみ）

日本人の食生活の状態を把握するためにNHKが行った食生活に関する世論調査のデータが紹介されている。

16歳以上の男女を無作為抽出した全国の3600人を対象に、食生活調査を行ったところ、朝食の欠食率は、若年層で男性25%、女性21%であり、若年層に朝食の欠食、昼食の欠食、栄養バランスを考えた朝食をとっている人が少ないことがわかった。25年前の調査と比較すると、朝食を摂らない人が増え、その年齢層も広がっている。また、昼食は、男性の20代で9%、30代で8%が昼食を摂っていない。夕食は、男性の50代、女性の30代より上では、8割以上が自宅で食事をしていたが、女性の20代は7割と割合が低くなっていた。また、生活時間のバラつきによる、食事を通しての家族団らんが減り、中高年の孤食が増えている。

日本の外食市場は24兆円、中食市場は6兆円で、合わせて30兆円規模であり、食べ物があふれている。一方、食生活の豊かさのなかには、3食食事をとっていないといった食生活の乱れという意味での崩食と健康や栄養バランスなどは考えずに食生活に無頓着で、放任状態の食生活、放食も存在する。

現代の日本人の食生活に関する価値観や問題点および日本人の食習慣の変化、日本の食文化伝承に関する重要な課題を提起し明らかにしようとした本である。

健康栄養学科の学生さんのみならず、他学部、他学科の学生さんにも是非読んで頂き、一度自分の食生活や家族の食生活について考えるきっかけになればいいと思う。（公衆栄養学）

498.5 S/HOSH　2階閲覧室

『よあけ』（福音館　1977 年）

ユリー・シュルヴィッツ作・絵　瀬田貞二訳

短期大学部　こども保育学科　下口美帆（しもぐちみほ）

本書は静けさに満ちた「夜」に少しずつ光が染みとおってくるようなとても美しい絵本です。何層にも重なり合って生み出された深みのある夜の色、光に満ちた鮮やかなグリーン、絵の端に見えるオーガンジーのような色の重なり、色彩そのものが輝いているようです。特に美しいのは夜が明ける少し前、湖面に月の光が鏡のように映っているページから次のページ、月の光が風に揺れてさざなみをおこす所です。私は自分も絵を描きますが、光や風などの目には見えないものをこんなに魅力的に表現している点に敬意を覚えます。

この絵本との出会いは大学院生の時、絵本を研究している友人に見せてもらったのが最初でした。学校に行く途中のカフェにも置いてあり、作品制作がうまくいかない時の気分転換に紅茶とともにお世話になった思い出深い一冊です。今でも本屋さんに行くと置いてあるかどうかチェックして、あれば心持ち緊張しながら一通りページをめくり、ため息とともに満足します。

こんなにラブコールを送っていながら、実は私、この本を持っていないのです。

以前、好きな男の子に「誕生日に欲しいものある？」と訊かれた事がありました。真っ先にこの絵本が思い浮かんだのですが、「大人になって絵本が欲しいってのもなぁ」と、何となく言えなくて、かといって自分で買うのも悔しく、そのままもう何年にもなります。手に入れたいけれど手が出せない、まるで片思いのようなこの一冊、皆さんにお薦めしたいような、内緒にしておきたいような複雑な心境です。（美術教育学）

726.5/ShU　1階絵本コーナー

‡ Topics 2 ‡

◆学習・研究のためのパソコンが10台増えました。

1階閲覧室に4台と3階閲覧室に6台を配置しましたので、資料の検索や卒論・レポート作成に活用してください。

図書館と私

日本語日本文学科　平成19年度卒業　赤松（あかまつ）　ツル子（つるこ）

私は1927年1月生まれの戦中派。読書欲旺盛だった頃、地区に図書館はなかった。貸本屋で本を借りて読んでいた。読んでは返しまた借りるため日参している状態だった。ついに胃痛に見舞われてしまった。

あれから幾歳月、昭和から平成へ。孫との会話の流れの中で突然「行けば」と言われた。何処へ？問いかえす間もなく「学校」と言った。背中を思いっきりドーンと押されて定時制高校に。二年生の終わりの頃、担任の先生が「昼の大学行けるよ」とサラッと言われた。学ぶことに遅いも早いもない。

大学に入学して図書館を意識した。図書検索は習得したものの、やはり司書の方を頼りにしている。そのほうがスムーズにいく。三年生になるとゼミの関係で専ら三階の日本文学コーナーへ。その日は三階まで上がって降りて、また上がる時しんどい、と声に出てしまった。司書の方がカウンターから見えない所にあった、書籍運搬用だと言われたエレベーターに乗せてくれた。ものすごく嬉しかった。ものすごく親切だと思った。だが私事で迷惑をかけた事には自己反省している。

ひるがえってエレベーターの存在そのものが、物品運搬用の是非に関係なく、確かな安堵感を私にもたらせてくれた。

寄贈図書一覧（平成19年1月～12月受入）

寄贈者の50音順（敬称略）

〈現旧教職員（非常勤含む）〉

糸井　通浩
国語語彙史の研究　他

太田　清史
ユングの心理学　他

岡本　和子
知覚はおわらない　他

勝田　至
敏満寺は中世都市か　他

加藤　実
特別展　美麗　院政期の絵画

河原　俊昭
外国人住民への言語サービス　他

光華女子学園
白萩の道　大谷智子歌集

鳥居　晶子
しろしろのさんぽ　他

野田　泰三
大地の肖像

芳賀　紀雄
LEGEND 説話データベース　Vol.1 他

三村　晃功
式子内親王全歌集　他

吉村　啓子
ストーリーの心理学

岡本　民夫
心を育てる　他

小森　悦子
日本舞踊曲集覧　他

真宗大谷派宗務所
あなたがあなたになる48章　他

三輪　隆
タイ・黄金三角地帯

〈学園関係者・他〉

石田　美和子
ガンダーラ美術とクシャン王朝　他

今泉　忠芳
柿本朝臣人麻呂之謌集七夕歌表記論　他

※図書の詳細はOPACで調べることができます。
※1階光華コーナーにも現旧教職員の寄贈図書があります。
※この他に、学外の方からも多数の図書をご寄贈いただきました。改めて御礼申し上げます。

Information

◆図書館ツアーに参加しましょう。

図書館を上手に利用するためのツアーを開催しています。「大学基礎講座」やゼミ等の授業で実施しており館内見学や基本的な利用の仕方から、レポート・卒論作成に役立つ資料の探し方・データベースの利用方法をご案内しています。3，4年生ではパソコンを使っての文献検索を中心に行っています。

昨年は749名の参加がありました。アンケートの中には「もっと早く、図書館ツアーに参加すればよかった」との声もあり好評でした。

希望に合わせて参加できる初級向きと上級向きの個別ツアーもありますので是非ご参加ください。

◆マイライブラリを活用しましょう。

図書館からの連絡や新着図書の情報、現在、借りている資料を知ることができるマイライブラリは図書館ホームページや光華naviからアクセスすることができます。

Schedule

◆4月3日（木）　新入生図書館ガイダンス
◆4月7日（月）　新学期開館
◆4月9日（水）　春休み貸出図書の返却期限日

編集後記
ご寄稿くださいました皆様には心より御礼申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。